

【その他】

看護の源泉たる弱さの自覚と共感についての一考察

— 聖隷学園浜松衛生短期大学教育理念から —

清水 隆裕 入江 拓

聖隷クリストファー大学看護学部

Awareness and Sympathy of Weaknesses as a Source of Nursing

— Educational philosophy of Seirei Gakuen Junior College of Nursing —

Takahiro Shimizu, Taku Irie

School of Nursing, Seirei Christopher University

《抄録》

聖隷学園浜松衛生短期大学の教育理念には「人の生命は傷つき、病み、死ぬべき弱い存在である。自分と他人とが共有しているこの弱さの自覚と共感と互助こそ、人間理解と愛と感動の基本であって、それが看護の源泉である」と謳われていた。短期大学からクリストファー大学となり、その教育理念は建学の精神である「生命の尊厳と隣人愛」に包含される形になったが、弱さを人間観の根底に据えた教育理念は他大学と一線を画している。そこで弱さの自覚がなぜ看護の源泉になるのか考察した結果、弱さという自己の「不完全性」を認めることは、苦悩へと繋がるがそれを受け入れた先に、ケア者としての真の思いやりが醸成される。また弱さを受け入れることができれば、ケア者と病者が人間としての弱さを抱える者同士としての開かれた地平にあることができ、そこでの真の出会いと、静かな連帯によって「双方の可能性を開く」という意味が含まれていると考えられた。

《キーワード》

弱さ、看護、教育理念

I. はじめに

本学は1949年の遠州基督学園から端を発し、1952年聖隷准看護婦養成所、1966年学校法人聖隷学園設立および聖隷学園高等学校衛生看護科開学、1969年聖隷学園浜松衛生短期大学、1992年聖隷クリストファー看護大学、2002年聖隷クリストファー大学と発展を遂げてきた。教育事業が発展するに伴って教育理念が明文化され、聖隷学園浜松衛生短期大学（以下、聖隷短大）の学則第一条の前文には、短大教師研修会の提案から1年近くの検討の結果を経て、「人の生命は傷つき、痛み、死ぬべき弱い存在である。自分と他人とが共有しているこの弱さの自覚と共感と互助こそ、人間理解と愛と感動の基本であって、それが看護の源泉である」と謳われることになった（八田、1983）。

この教育理念を踏まえながら、翻って他の看護系大学の教育理念を概観してみると「ひとりの人間を尊重できるようになるために人間性の豊かさを育む」と、ほぼ一律な文言で表現されていることに気づく。つまり聖隷短大の教育理念は、豊かさ（いわば持っていること）とは逆の弱さ（いわば持っていないこと）が強調されている点で、他大学と一線を画している。その教育理念は、聖隷短大が聖隷クリストファー大学に発展的解消された際に、「生命の尊厳と隣人愛」と、より抽象度の高い文言に包含される形になった。しかし、数多くの看護系大学が設置されている現状の中で、弱さを強調した聖隷の教育理念の独自性を世に発信していくことは、聖隷が聖隷たらしめる意味を問うためにも、また数多くある大学のひとつにならないためにも重要であろう。

さて、聖隷短大の教育理念を要約化すると「人の生命はすべからず弱い。弱いことを自覚する

ことが看護の源泉である」となる。これは内なる自分の脆弱性に目を向けよ、という内向的思考や、感受性の重要性を説いているのは明らかである。しかし、より強いことを志向する看護医療職にあつて、その教育訓練は、対象者への問題解決志向的視点や、知識の習得活用、それに伴った技術という外向的思考や行動に偏る傾向があり、対人関係職として、自分が対象者にとってどのような人間として存在しているのかという問いや、内向的思考の重要性は表立って語られてこなかった傾向がある。

弱さの自覚こそ看護の源泉であることは、実際に人の生命の脆弱さと隣りあわせの結核患者と共に生きた、聖隷事業団黎明期の方々にとっては、現実体験であるため自明のことであろう。しかし、その行間に含まれる祈りや願いを読み取ることは、時間とともに難しくなっている。

それではいかなる根拠で、弱いことの自覚が看護の源泉になると述べられているのであろうか。また現在校名にもつけられている、人々の罪、悲しみを下支えするクリストファーの強さは、教育理念で述べられた弱さの自覚と、どのように整合性がとれるのであろうか。やはり、強いからこそ苦しむ人間を支えることができるのではないのか。

最近の聖隷クリストファー大学の満足度調査において、キリスト教の精神を学ぶことができたという項目は、点数が低い傾向がある。本考察は、筆頭著者の聖隷クリストファー大学看護学部卒業生としての責任と、ノンクリスチャンの立場から、弱さの自覚が看護の源泉へとつながる根拠を考察し、学生と看護教員が共有可能な聖隷精神を整理することを目的とする。そのことは、今後ノンクリスチャンの立場でありながら建学の精神を携えた医療職者を目指す者た

ちの思考過程の一助となるであろう。

Ⅱ. 「弱さ」とは何を指しているのか

まず、聖隷短大教育理念のキーワードともいえる「弱さ」とは、何を指しているのか考えてみたい。1978年の聖隷学報で西村牧師は、「病人の原語は『弱さ』を意味し、身体上だけでなく精神上のこともあらず。病気は肉体のものでも精神と深くからみあい、また精神のゆがみが身体に病理症状ひき起こすことを考えれば、聖書が両者をあわせ含めた『弱さ』の語で病人をあらわした洞察を驚かざるを得ない」と弱さを述べている（西村、1978）。つまりここでは、少なくとも「弱さ」は、弱点や劣っているという意味ではなく、身体的次元と精神的次元の病をもつ者のことを指している。それでは、「弱さの自覚が看護の源泉」とは、自分が心身ともに病気になる可能性を自覚することが看護の源泉になる、という意味なのであろうか。

そこで教育理念を振り返ると、「人の生命は傷つき、病み、死ぬべき弱い存在である」とあった。つまり人間の生命は、不安定さ、不確定さ、あいまいさ、儂さ、脆さ、危うさ等々のなかに常に存在しているのである。言い換えれば、人間の生命は今まで確かにあったものが、次の瞬間には無くなっている恐れを秘めた、永遠の喪失の可能性の中にいる。すなわち人間の生命は、心身ともに病む可能性があるように、完全性や安定性が「ない」ということを「弱い」と表現していると読み取れる。

「弱さ」＝「ない」、つまり「喪失」を自覚し吟味することは、悲しみや絶望感、無価値感、罪悪感という苦悩へと連鎖することになる。しかし喪失体験＝弱さの体験は、人生にとって苦悩をもたらすだけではない。真摯に向き合うこ

とで、人間の成長につながるの指摘は、以下のように多くの各識者が述べているとおりである。キューブラー・ロス「すべての苦難は、あなたに与えられた成長のための機会」（Kubler-Ross, 1999）。クラインマン「人生の試練すなわち不運や苦悩や災難が、忍耐と真正の現実を受容するように教える」（Kleinman, 2006）。 فرانクル「苦悩は実行することであり、また成長することである。しかし、また、それは成熟をも意味する」（Frankl, 1951）。スコット・ペック「人間の偉大さを測るひとつの尺度は苦悩する能力」「人生における唯一の心の安定は、不安定を享受すること」（Scott Peck, 1978）。鷲田清一「何かを意のままできないことを受容を（いのち）の成熟という」（鷲田、2008）。ローランズ「もっとも大切なあなたというのは、幸運が尽きてしまった時に残されたあなただ」（Rowlands, 2008）。ヤスパース「人間が挫折をどのように経験するかということは、その人間を決定する要点」（Jaspers, 1950）。

では、ないことや喪失の苦悩を吟味すること、すなわち「弱さと向き合うこと」＝「弱さの自覚」が、人間の成長につながるのだとしても、なぜ看護の源泉となりうるのかを考えてみたい。

看護の源泉は看護者が抱く、病と闘うものに対するベナーが述べるような「思いやり」言い換えれば気遣い・配慮と呼ばれるケアリングの態勢であろう（Benner, 1989）。それではケアリングの態勢はどうやって醸成されるのであろうか。精神分析理論の視点を借りれば、人間の真の思いやりのこころの獲得は、乳児期に自分を育ててくれた良い乳房を、自分自身の攻撃性によって破壊してしまった、喪失してしまった、という罪悪感や悲しみから発生する。その罪悪感や悲しみが「愛する人たちが同様の痛みを味わわなくてよいようにしたい」との願いをもた

らし、この願いが「思い遣り」「気遣い」というところのはたらきとなる(松木、2011)。

すなわち、人間に対する真の思いやりの獲得は、喪失とそれに伴う悲しみ＝弱さをいかに受け入れていくかという、自分自身の姿勢と勇気と覚悟と決断と信念が永遠に問われつづけているのである。苦悩を伴いながらも耐え、弱さを受け入れた先に、相手への真の思いやりの醸成と発動があるのである。そのことは、神学者かつ牧者ナウエンも「つらい鬱状態をくぐり抜けてきた時、私たちは自らの経験について触れることなく、深い思いやりと愛をもって、意気消沈している友人に耳を傾けることが出来ます」(Nouwen、1997)と同様に述べている。

さて、医療職者、特に学生は、病になって苦しむ人々を支えたいと願って医療職者や看護学を志すものが大半であろう。ただそこには、自分には病に苦しむ人を支えられる力が「ある」という万能感的空想が存在するとも言える。言い換えれば、強さを持った外なる自分が原動力になっていることがある。しかし、学生もしくは看護医療職者は、実際に病と闘う者と向き合ったときに、簡単に相手がケアを受け入れてくれず癒すことができない、支えになることができない自分に直面化させられることが多くある。その結果、内なる等身大の、弱く、相手を支えることのできない自分の限界が、眼前に圧倒的な力で迫って問いかけてくるのである。自分はそんなに役に立たない人間だったのか?と。そこで自分の限界を受け入れられず、万能空想的な自分にしがみつ়場合は、弱い自分が表面化しないよう、外なる自分の強化のために患者を利用し積極的であるように見せかけた、自分のエンパワメントのためのケアを行うであろう。例えば精神看護学実習でいえば、部屋に引きこもることで、ここを守ろうとしている患者に

たいして、患者を変化させようとホールに引き出そうと必死になることは、よくある学生の行動である。患者の行動が変化すれば、役に立っているという幻想に基づく欲求が満たされ、自分が安心なのである。もしくは看護の対象である人間ではなく、患者の病的な臓器に着目し、治療しようと医学的な視点に執着するであろう。

教員であっても同様の注意が必要である。教員であるならば、学生を一人前の医療職者に成長することを導くことができる、外なる万能空想的自分があるであろう。ところが、自分の空想通りに成長できない学生に触れると、自分の教育者としての弱さに直面化させられる。そのとき自分の弱さに耐えることができなければ、支配的コントロールを行うことで自分のニードに沿った矯正を試み、性急に達成感を求めようとする可能性が高まると考えられる。または、自己の弱さを学生に投影し「学ぶ姿勢がない」「何も知らない」というように、自分の能力に限界があるのではなく、学生側が悪いと体験することで、強い自分を過度に防衛することが考えられる。

以上のことから、「弱さ」とは病人であることと、自分が病気になる可能性から出発し、自分自身の不完全性、不安定性すなわち「ないこと」を指すと考えられる。そこから発生してくる、苦悩を受け入れる勇気と覚悟を備えることを、弱さの自覚と表現しているのではないだろうか。そしてその態勢は、学生、医療職者、教員を含め、どのような立場になっても必要な心構えになってくるのであろう。

Ⅲ. 「弱さ」の可能性

次に、弱さの自覚と共感と互助の関係性を考えていくことにする。一般的に「弱い」は「強い」

の対義語である。しかし、八田によれば、弱さは強さの対極の現象ではなく、弱さでひとつの病人という意味を持って表現されていた。そこで松岡正剛が「弱さ」は「強さ」の欠如ではない。「弱さ」というそれ自体の特徴を持った劇的でピアノッシモな現象なのである」（松岡、2005）と述べているところからヒントを得て、弱さを考えていくことにしたい。

ピアノッシモとは音楽用語で「非常に弱く演奏すること」であるが、この弱くは音量が小さいことを指す。しかしその弱音量の中に力強さや繊細さ、儂さ、恐ろしさ、優雅さなど、さまざまな意味が包含され、むしろ弱音量であるからこそ、弾き手は内なる熱量を自由に表現し、また聴き手は自由に解釈する相互作用の可能性が開く。例えば、指揮者の宇野功芳は、「未完成第一楽章」の感想で「きわめて遅いテンポと強調されたピアノッシモで開始されると、あたり一面に神秘的な雰囲気漂う。音楽は荘重に運ばれ音色もあくまで渋いが、決して鈍重には陥っていない」と表現している。また「ボヘミアの風と草原より」の感想では「ピアノッシモでも少しも繊細ぶらず、むしろ鮮烈な勁い音を出し」とも表現している（宇野、2003）。つまりピアノッシモとは、ただ音量が小さいわけではない。弱音量とは、弱音量であるからこそ神秘的であり、厳かであり、繊細であり、むしろ逆に強いというような、弾き手の表現のありようと、聴き手の“能動的受信性”によって、生み出される意味合いが変化する、2者間の可能性存在なのである。聴き手の受信性能力が発揮できない場合は、その音楽は小音量の意味そのままにとられるであろう。音楽では、その2者間の能動的なやり取りのさまを重視しているために、客観的指標である音量だけに着目する「小さい」と表現せずに「弱い」と表現していると

考えられる。

話は戻って教育理念に謳われている「弱さ」とは、音楽における弾き手と聴き手の相互作用を開く、可能性存在のことを弱いと表現しているのと同様に、病人とケア者の心的相互作用における可能性存在のことを、弱いと表現しているのではなかろうか。

病と闘う対象者は、疲れ果て心身のエネルギーが枯渇し、内なる自分を表現できずにいる可能性がある。また心身の変化に戸惑い、動揺し、病気の下にその人らしさが隠れてしまっている場合がある。しかし、その裏にはさまざまな弱音量の思い、願い、祈り、悲しみ、苦しみや時には安寧、諦観、達観、幸福が流れていることもある。そのときのメッセージは正に、ピアノッシモな音楽のような存在である。そのような状況にある者と向き合うときは、音楽の聴衆者のように、静かに物思いにふけるように待ち、自分の価値観や健康観を可能な限り静め、こころ穏やかに聞き耳を立てる必要がある。つまり自身も鏡映的な存在として、相手の微弱なメッセージを受信できる、ピアノッシモな態勢を要求されているのではないだろうか。そのような時に、強い態勢（いかなればフォルテッシモ）であろうとすれば、弱音量に潜む可能性が大音量にかき消されるのと同様に、相手が発信しているメッセージを受信できずに呑み込んでしまうであろう。

その静かに耳を澄ますことは、弱さという世界を受け入れることが必要であり、その弱さの世界にたどり着くプロセスは、伊藤が述べるように階段を下りるというイメージに近い（伊藤、2014）。階段から降りた先の、薄暗く静まり返った地平こそ、弱い人間同士がたどり着き、真に出会う共感の場であり、弱さを抱えた人間者同士として、助け合うことなしではられない互

助の場なのであろう。そしてその場こそ2者間での共生によって、新しいものを生み出す可能性の場でもあるのだ。その互助と共生のことを、ジャン・バニエの言葉を借りれば「私の弱さは他の人の賜物による助けが必要なことを

教え、他の人の弱さは、私の賜物による助けが必要なことを教えるからだ」(Vanier, 1994)となる。

その弱さを抱えた人間同士が出合う世界に下りていくプロセスを図1に示した。

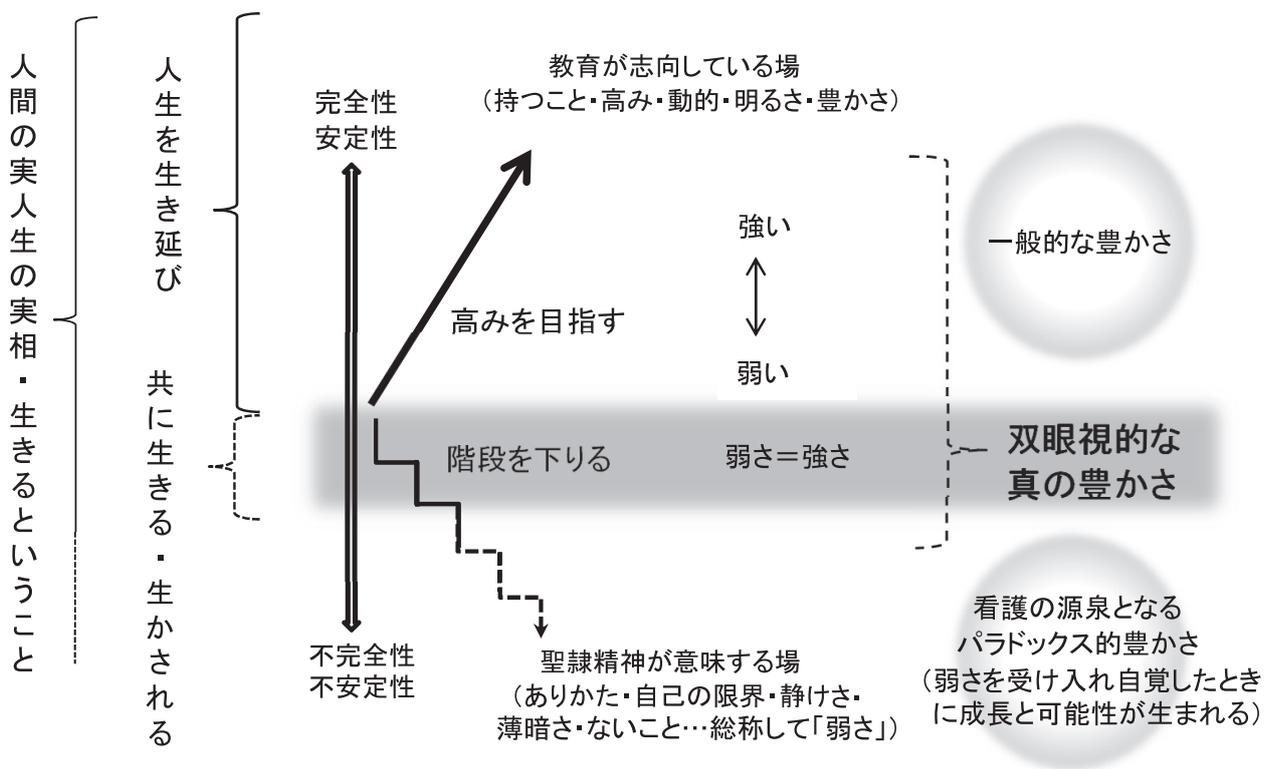


図1. 聖隷短大教育理念から導き出された弱さの自覚と看護の源泉に関する概念図 ver1.2

※人間は完全性と不完全性の対立軸上で生きている。その中で一般的には完全性への高みを目指すことが豊かさとして捉えられている。高みに上ると強い⇔弱いの関係性になりやすい。しかし、聖隷短大の教育理念はその逆の弱さの重要性を説いている。弱さは本文で述べた通り、成長と可能性存在の事を指す。弱さの自覚は苦悩の作業になるため、一步一步、恐る恐る階段を下りていく必要がある。階段を降りきってしまうと、真っ暗な自閉的な世界である。そのため、病気で弱くならざるをえない患者と、弱い人間としての自分が真に出会うところは、階段を下りる途中のイメージである。その地帯は弱さは強さも含めて弱さで一つの意味を持った世界である。この完全性の世界と不完全性の世界がバランスよく自分の中に築きあげられるとき、双眼視的な真の豊かさを持った人間となる。

実践例を挙げれば、「夜も昼のように輝く」の中で、A氏の臨終の際は、咳に苦しみ、骨と皮ばかりになり、死相こく、顔は緊張そのものであったが、最後は天使のように清く輝いていたとあった（長谷川、2001）。おそらく死の間際の身体的な苦しみがあるにもかかわらず、A氏に底流している実存的には幸福なメッセージを援助者が静かに耳を澄ます地平にあることによって受信することができたのであろう。

すなわち、弱さの自覚とは、静かな世界に身を置き、微弱なメッセージを受け入れる受信態勢を整えることの重要性をも説いているのであろう。しかし、それは高みを目指す動的な世界とは逆の、弱さという世界があることも受け入れられる者にしかできないのである。ところが、看護教育の文化はいわば強くあること、高みを目指すという態度を要求してきた傾向がある。聖隷の教育理念を体現するには、看護教育のなかで培われる知識や技術というような、ケアリングを補強していく鎧、筋力をいったん身につけるとしても、そのあとで再度、自分と相手の人生の脆さ儚さ、空白や余白、停滞などというような弱い自分と、その世界を許すことができるような、生身の人間に戻ることができるのかが問われているのであろう。

その患者—看護師間を乗り越え、お互い弱い人間同士が触れ合うとき、本当の人間同士の出会いとなる。その出会いと触れ合いに患者が感動し、看護師が感動し、その結果として患者は自然治癒力を高め、看護師は深化していくという可能性が生み出されるのである。

以上のことから、「弱いことが看護の源泉」とは、弱さという自己の「不完全性」を認めることは、苦悩へとつながるがそれを受け入れた先に、援助者としての真の思いやりとその態勢が醸成される。また弱さを受け入れることがで

ければ、お互い弱い者同士としての地帯にあることができ、そこでの真の出会いによって「双方の可能性を開く」という意味が含まれているのではなかろうか。ただそれは、教員—学生間でも同じことが言えるだろう。ピカートはその様を、以下のように述べている「沈黙の実体がまだ生きてはたらいっていることを人々がしている世界においては、人々は人間をただ彼の単なる素質の域内に止めておきはしない。正しい教育、正しい授業はかならずこの沈黙の実体の上に基礎づけられている」（Picard、1948）。

Ⅳ. 「弱さ」とクリストファーの整合性について

では、校名になっている「クリストファー」と「弱さ」はどのように関連しているのであろうか。人々の罪と悲しみを支えるということは、人間としての強さを要求されているのではないだろうか。

まず、ここで聖隷クリストファーの語源である聖人クリストファー伝説について振り返っておくことにする。クリストファー伝説には諸説あるが、長谷川の言葉を借り、要約すると「クリストファーはどんな大木を背負う怪力の若者である。彼は世界一強いものの元に仕えたいと願い、王、悪魔に使えたが満足できなかった。橋渡しの職に就いている時に少年を川の向こうに担いで移動しようとした際に、その少年が考えられないくらいの重さになり、やっとの思いで向こう岸にたどり着いた。その少年が人々の罪と苦しみを背負ったキリストの化身だった。」（長谷川、2000）とある。

聖隷短大の教育理念を聖隷クリストファー大学がそのまま受け継いでいるならば、クリストファー伝説で聖隷精神が大切にすべき中心的な

文脈は、2つあってもよいのではなかろうか。1つは人間の悲しみや苦しみを下支えする力強い存在と解釈するもの。もう1つは力強さを自覚し、自分なら世界一強い人間に仕えられると幻想していたにもかかわらず、人々の悲しみや苦しみの前には、自分は力不足だ、ということを実感していくプロセスを表現していることである。だからこそ、一人の力では支えることが難しいメッセージとして、クリストファーは必ず杖をもちているのではないだろうか。そのことが聖隷教育理念を多角的に考える一端になると考える。

クリストファーの校名には、苦しむ人々を支える人間としての力をつけるという願いが込められている。しかし同時に、自分は無力な人間であるが、それでもなお自分が苦しむ人々を支えたいという現実的かつ呻くような願いも含まれるようになったとき、強者が弱者を支えるという視点から、お互いに弱い者同士支えあうという互助の関係が生まれ、安全に共に生きるということが可能になる、という双眼視的願いが隠されていると考えられる。

かつてパスカルは「人間は天使でも獣でもない。そして不幸なことに、天使になろうとすると獣になってしまう」と記した。奇しくも看護師は白衣の天使と表現される。それは、ケアされる者にとっては、苦悩や苦痛を含めてすべてを受け入れる超越的他者がそばにいて欲しいという願いがこめられている。しかし、その願い通りに看護師（人間）が天使（強いもの）になろうとすると、看護師は天使という理想自己像と、弱い人間という現実的な自己のギャップに苦しむことになる。その結果として、逆にその防衛や繕いのために、自分を天使足らしめるべく、相手を低く見ることにより支配する存在になり、結果的にさらに相手を辱めてしまうので

はないだろうか。

V. おわりに

はじめに戻り、聖隷短大の教育理念の学則第一条の前文には「人の生命は傷つき、病み、死ぬべき弱い存在である。自分と他人とが共有しているこの弱さの自覚と共感と互助こそ、人間理解と愛と感動の基本であって、それが看護の源泉である」とあった。抽象度を下げて解釈を加えることは、思考の自由度を下げることにもなり慎重でありたいが、教育理念を私なりの考察を踏まえて学生に伝えようとするのなら、以下のような態度をとるであろう。

「現実社会では、医療者はより強くあれという内外からの圧力の中にいる。医療職者になろうとする者、また医療職者自身もその幻想の中に陥りがちである。しかし患者も医療職者も同じ人間であることは間違いない。人間は怪我、病、老い、別れ、死など無限の喪失の悲しみの中にいつづける。時には自身の怒り、憎しみ、嫉妬、羨望などの負の感情に呑み込まれる時もある。私たちはそのような人間であり、そのような儂く脆い不安定な存在であることを忘れてはいけない。儂く脆い不安定な存在、それらをまとめて表現するなら「弱さ」であろう。私たちは人間であるがゆえにわけへだてなく「弱さ」を抱えている。それを直視し自分の限界に苦悩する勇気と覚悟があれば、病と闘うことで、疲弊し弱くならざるをえない患者と、それを支える強い医療職者という強者－弱者の関係から、それ以前の同じ弱さという悲しみを背負う、人間同士の地平にあることができる。自らの持つ苦悩や悲しみを吟味できるようになれば、強者として繕わなければいけないエネルギーがそがれ、弱った人間の微弱なメッセージに耳を澄ま

すことができるようになる。微細な振動を受信できるようになる。患者だけでなく、様々な生き方をする者同士として、支えあい共にそばにいられるようになる。たとえ自分を受け入れてくれない者や、憎いもの、理解できない現象であっても許し、受け入れられるようになる。ゆえに、自分が弱い存在であることを受け入れることができれば、おのずから愛が発動する可能性が広がる。強いものという幻想の中にしがみつけば、弱さを抱える人間が放つ小さな声に気づくことはできないのではないか。ただ、ここで勘違いしてほしくないのは、弱さのみを追求し自虐的に生きるという意味ではない。意識しておくことよきことは、強さを求めがちな医療職者において、確かに弱い自分もあり、それをバランスよく見つめなおすことができたときに、どのような立場でもキリスト教精神を踏まえた医療職者としての成長の可能性があるというのではないか」という態度である。

聖隷短大の教育理念は、自分があくまで人間で、努力を重ねようとも限界があり、有能であることが幸せではない。むしろ豊かになれないと自覚したときに、結果的に相手に対する共感と、互助と、愛が発動するというパラドックスで成立している稀有なものである。豊かになる教育ではなく、豊かになれない苦悩と、諦めと、悲しみ、それを受け入れる勇気と覚悟を語っている教育理念は聖隷精神の独自性として誇るべきものであろう。

クリストファーは強くもあつたし弱くもあつた。しかし弱さの自覚のプロセスを踏んだからこそ、周囲の声に静かに耳をひそめながらも諦めずに立ち向かっていくのであり、その姿勢こそ真の豊かさであり、真の強さなのであろう。

引用文献

- Frankl, V. E (1951) : Homo patiens, Versuch einer Pathodizee. 真行寺功訳 (1998)、「苦悩の存在論」、p118、新泉社、東京.
- 長谷川了 (2000) : 『クリストファー』とは、聖隷学園報第 23 号、p 1.
- 八田亨二 (1983) : 聖隷短大の教育を考える (2) 現実と目標、聖隷学園報第 14 号、p 3.
- Jaspers, K. T (1950) : Einführung in die Philosophie. 草薙正夫訳 (1954)、哲学入門、p31、新潮社、東京.
- Kleinman, A (2006) : What Really Matters : Living a Moral Life amidst Uncertainty and Danger. 皆藤章監訳、高橋寛訳 (2011)、八つの人生の物語、p10、誠信書房、東京.
- Kübler-Ross, E (1999) : Death is of vital importance. 鈴木晶訳 (2001)「死ぬ瞬間」と死後の生、p75、中央公論新社、東京.
- 松木邦裕 (2011) : 不在論、p88、創元社、東京.
- 松岡正剛 (2005) : フラジャイル 弱さからの出発、p16、筑摩書房、東京.
- 西村一之 (1978) : 《聖書の言葉》弱さと戦え、聖隷学園報第 5 号、p 3.
- Nouwen, H. J. M. (1997) : Bread for the Journey A daybook of Wisdom and Faith. 河田正雄訳 (2001)、改訂版、今日のパン、明日の糧、p240、聖公会出版、東京.
- Picard, M (1948) : Die Welt des Schweigens. 佐野利勝訳 (1964)、沈黙の世界、p73、みすず書房、東京.
- Rowlands, M (2008) : The Philosopher and the Wolf : Lesson from the Wild on Love, Death and Happiness. 今泉みね子訳 (2010)、哲学者とオオカミ 愛・死・幸福についてのレッスン、p15、白水社、東京.

Scott Peck, M (1978) : The Road Less Traveled. 氏原寛、矢野隆子訳 (2010)、愛すること、生きること、p79・p142、創元社、東京.

宇野功芳 (2003) : わが魂のクラシック、p147-148、青弓社、東京.

Vanier, J (1994) : The poor are a source of life. 長沢道子訳 (1994)、小さき者からの光、p112、あめんどう、東京.

鷺田清一 (2008) : 死なないでいる理由、p122-123、角川学芸出版、東京.

参考文献

Benner, P., Wrubel, (1989) : The Primacy of Caring: Stress and Coping in Health and Illness. 難波卓志訳 (1999)、現象学的人間論と看護、p 1- 6、医学書院、東京.

長谷川保 (2001) : 夜も昼のように輝く、第 15 版、p76-79、聖隷歴史資料館、浜松.

伊藤邦幸 (2014) : 無垢の心をこがれ求めるー伊藤邦幸・聡美記念文集ー、p114-133、デンマーク牧場、袋井.